

三つの窓

芥川龍之介

青空文庫

1 鼠

一等戦闘艦××の横須賀軍港へはいつたのは六月にはいつたばかりだった。軍港を囲んだ山々はどれも皆雨のために煙っていた。元来軍艦は碇泊したが最後、鼠の殖えなかつたと云うためしはない。——××もまた同じことだった。長雨の中に旗を垂らした二万噸の××の甲板の下にも鼠はいつか手箱だの衣囊だのにもつきはじめた。

こう云う鼠を狩るために鼠を一匹捉えたものには一日の上陸を許すと云う副長の命令の下つたのは碇泊後三日にならない頃だつ

た。勿論水兵や機関兵はこの命令の下った時から熱心に鼠狩りにとりかかった。鼠は彼等の力のために見る見る数を減らして行つた。従つて彼等は一匹の鼠も争わない訣には行かなかつた。

「この頃みんなの持つて来る鼠は大抵八つ裂きになっているぜ。寄つてたかつて引っぱり合うものだから。」

ガンルウムに集つた将校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顔をしたA中尉もやはり彼等の一人だった。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほんとうには何もわからなかつた。が、水兵や機関兵の上陸したがる心もちは彼にもはつきりわかっていた。A中尉は巻煙草をふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもこう云う返事をしていた。

「そうだろうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」

彼の言葉は独身者どくしんものの彼だけに言われるのに違ひなかつた。彼の友だちのY中尉は一年ほど前に妻帯していたために大抵たいてい水兵や機関兵の上にわざと冷笑を浴びせていた。それはまた何ごとにも容易よういに弱みを見せまいとするふだんの彼の態度にも合あっていることは確かだつた。褐色の口髭くちひげの短い彼は一杯いっぱいの麦酒ビールに酔つた時さえ、テエブルの上に頬杖ほおづえをつき、時々A中尉にこう言つたりしていた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

ある雨の晴れ上つた朝、甲板かんぱん士官だつたA中尉はSと云う水兵に上陸を許可した。それは彼の小鼠を一匹、——しかも五体ごたいの

整った小鼠を一匹とつたためだった。人一倍体の逞たくましいSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狭い舷梯げんていを下くだつて行つた。すると仲間の水兵ひとりが一人身軽に舷梯を登りながら、ちやうど彼とすれ違ひようしう拍子ひょうしに常談じょうだんのように彼に声をかけた。

「おい、輸入ゆにゆうか？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にはいらずにはいかなかった。彼はSを呼び戻し、甲板の上に立たせたまま、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちやんと直立し、A中尉の顔を見ていたものの、明らかに

しよげ切っているらしかった。

「輸入とは外から持つて来たものであります。」

「何のために外から持つて来たか？」

A 中尉は勿論何のために持つて来たかを承知していた。が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々しきを感じ、力一ぱい彼の頬を擲りつけた。Sはちよつとよろめいたものの、すぐにまた不動の姿勢をした。

「誰が外から持つて来たか？」

Sはまた何とも答えなかつた。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顔を張りつける場合を想像していた。

「誰だ？」

「わたくしの家内かないであります。」

「面会に来たときに持つて来たのか？」

「はい。」

A 中尉は何か心の中に微笑しずにはいられなかった。

「何に入れて持つて来たか？」

「菓子折に入れて持つて来ました。」

「お前の家うちはどこにあるのか？」

「平坂下ひらさかしたであります。」

「お前の親は達者たつしゃでいるか？」

「いえ、家内と二人暮らしであります。」

「子供はないのか？」

「はい。」

Sはこう云う問答の中も不安らしい容子ようすを改めなかつた。A中尉は彼を立たせて措おいたまま、ちよつと横須賀よこすかの町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積み上げていた。それは日の光を浴びていたものの、妙に見すばらしい景色けしきだった。

「お前の上陸は許可しないぞ。」

「はい。」

SはA中尉の黙っているのを見、どうしようかと迷っているらしかつた。が、A中尉は次に命令する言葉を心の中に用意していた。が、しばらく何も言わずに甲板かんぱんの上を歩いていた。「こいつは罰を受けるのを恐れている。」——そんな気もあらゆる上官

のようにA中尉には愉快でないことはなかつた。

「もう善い。あっちへ行け。」

A中尉はやつとこう言つた。Sは挙手の礼をした後、くるりと彼に後ろを向け、ハツチの方へ歩いて行こうとした。彼は微笑しないように努力しながら、Sの五六歩隔つた後、俄かにまた「おい待て」と声をかけた。

「はい。」

Sは咄嗟にふり返つた。が、不安はもう一度体中に漲つて来たらしかつた。

「お前に言いつける用がある。平坂下にはクラツカアを売っている店があるな？」

「はい。」

「あのクラツカアを一袋買って来い。」

「今でありますか？」

「そうだ。今すぐに。」

A 中尉は日に焼けたSの頬ほおに涙の流れるのを見のがさなかった。

それから二三日たった後のち、A 中尉はガンルウムのテエブルに女名前の手紙に目を通していた。手紙は桃色の書簡箋しょかんせんに覚束おぼつかないペンの字を並べたものだった。彼は一通り読んでしまうと、一本の巻煙草に火をつけながら、ちようど前にいたY中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？ …… 『昨日のことは夫の罪にては無之、皆浅はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不悪御ゆるし下され度候。 …… なおまた御志のほどは後のちまでも忘れまじく』 ……」

Y 中尉は手紙を持ったまま、だんだん輕蔑の色を浮べ出した。それから無愛想にA中尉の顔を見、冷かすように話しかけた。

「善根を積んだと云う気がするだろうか？」

「ふん、多少しないこともない。」

A 中尉は輕がると受け流したまま、円窓の外を眺めていた。

円窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだった。しかし彼はしばらくすると、俄かに何かに羞じるようにこうY中尉に声をか

けた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンタを張った時には可哀そうだとも何とも思わなかつた癖に。……」

Y中尉はちよつと疑惑とも躊躇ちゆうちよともつかない表情を示した。

それから何とも返事をしらずにテエブルの上の新聞を読みはじめた。ガンルウムの中には二人ふたりのほかにはちようど誰もい合わせなかつた。が、テエブルの上のコップにはセロリイが何本もさしてあつた。

A中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしていた。こう云う素そつ気ないY中尉に不思議にも親しみを感じながら。……

2 三人

一等戦闘艦××はある海戦を終った後、五隻の軍艦を従えながら、静かに鎮海湾へ向って行った。海はいつか夜になつていたが、左舷の水平線の上には大きい鎌なりの月が一つ赤あかと空にかかつていた。二万噸の××の中は勿論まだ落ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後だけに活き活きとしていることは確かだつた。ただ小心者のK中尉だけはこう云う中にも疲れ切つた顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこを歩きまわつていた。

この海戦の始まる前夜、彼は甲板を歩いているうちにかすか

な角燈かくとうの光を見つけ、そつとそこへ歩いて行つた。するとそこには年の若い軍楽隊ぐんがくたいの楽手がくしゅが一人甲板ひとりの上に腹ばいになり、敵の目を避けた角燈の光に聖書を読んでいるのであつた。K中尉は何か感動し、この楽手に優しい言葉をかけた。楽手はちよいと驚いたらしかつた。が、相手の上官の小言こごとを言わないことを発見すると、たちまち女らしい微笑を浮かべ、怯おず怯おず彼の言葉に答え出した。……しかしその若い楽手ももう今ではメエン・マストの根もとに中あたつた砲弾のために死骸しがいになつて横になつていた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄にわかに「死は人をして静かならしむ」と云う文章を思い出した。もしK中尉自身も砲弾のために咄嗟とつさに命いのちを失つていたとすれば、——それは彼にはどう云う死よりも幸

福のように思われるのだった。

けれどもこの海戦の前の出来事は感じ易いK中尉の心に未だに
はつきり残っていた。戦闘準備を整えた一等戦闘艦××はやはり
五隻の軍艦を従え、浪の高い海を進んで行つた。すると右舷の大
砲が一門なぜか蓋を開かなかつた。しかももう水平線には敵の艦
隊の挙げる煙も幾すじかかすかにたなびいていた。この手ぬかり
を見た水兵たちの一人は砲身の上へ跨るが早いか、身軽に砲口ま
で腹這つて行き、両足で蓋を押しあげようとした。しかし蓋をあ
けたことは存外容易には出来ないらしかつた。水兵は海を下に
したまま、何度も両足をあかくようにしていた。が、時々顔を挙げ
ては白い歯を見せて笑つたりもしていた。そのうちに××は大

うねりに進路を右へ曲げはじめた。同時にまた海は右舷全体へ凄まじい浪を浴びせかけた。それは勿論あつと言う間に大砲に跨つた水兵の姿をさらつてしまふのに足るものだった。海の中に落ちた水兵は一生懸命に片手を挙げ、何かお声に叫んでいた。ブイは水兵たちの罵る声と一しよに海の上へ飛んで行つた。しかし勿論××は敵の艦隊を前にした以上、ボオトをおろす訣には行かなかつた。水兵はブイにとりついたものの、見る見る遠ざかるばかりだった。彼の運命は遅かれ早かれ溺死するのに定まっていた。のみならず鱧はこの海にも決して少いとは言われなかつた。……

若い楽手の戦死に対するK中尉の心もちはこの海戦の前の出来事の記憶と対照を作らずにいる訣はなかつた。彼は兵学校へは

いったものの、いつか一度は自然主義の作家になることを空想していた。のみならず兵学校を卒業してからもモオパスサンの小説などを愛読していた。人生はこう云うK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだった。彼は××に乗り組んだ後、エジプトの石棺せつかんに書いてあった「人生——戦闘せんとう」と云う言葉を思い出し、××の将校や下士卒は勿論、××そのものこそ言葉通りにエジプト人の格言を鋼鉄に組み上げていると思ったりした。従って楽手の死骸の前には何かあらゆる戦いを終った静かさを感じずにはいられなかった。しかしあの水兵のようにどこまでも生きようとする苦しさもたまらないと思わずにはいられなかった。

K中尉は額ひたいの汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれるため

に後部甲板こうぶかんばんのハツチを登つて行つた。すると十二吋インチの砲塔ほうとうの前に綺麗きれいに顔を剃そつた甲板士官かんばんしかんが一人両手ひとりを後ろうしに組んだまま、ぶらぶら甲板を歩いていた。そのまた前には下士かしが一人頬骨ひとりほおぼねの高い顔を半ば俯向うつむけ、砲塔を後ろに直立していた。K中尉はちよつと不快になり、そわそわ甲板士官の側へ歩み寄つた。

「どうしたんだ？」

「何、副長の点検前に便所へはいつていたもんだから。」

それは勿論軍艦の中では余り珍らしくない出来事だつた。K中尉はそこに腰をおろし、スタンションを取り払つた左舷さげんの海や赤い鎌くさなりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴くつの音のほかに入声も何も聞えなかつた。K中尉は幾分か気安さを感じ、やつと

きようの海戦中の心もちなどを思い出していた。

「もう一度わたくしはお願い致します。善行賞ぜんこうしょうはお取り上げになつても仕かたはありません。」

下士かしにわかは俄に顔を挙げ、こう甲板士官に話しかけた。K中尉は思わず彼を見上げ、薄暗い彼の顔の上に何か真剣な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり両手を組んだまま、静かに甲板を歩きつづけていた。

「莫迦ばかなことを言うな。」

「けれどもここに起立してはわたくしの部下に顔も合わされません。進級の遅れるのも覚悟しております。」

「進級の遅れるのは一大事だ。それよりそこに起立している。」

甲板士官はこう言った後、^{のち}、気軽にもた甲板を歩きはじめた。K中尉も理智的には甲板士官に同意見だった。のみならずこの下土の名誉心を感傷的と思う気もちもない訣^{わけ}ではなかった。が、じつと頭を垂^たれた下土は妙にK中尉を不安にした。

「ここに起立しているのは恥辱^{ちじよく}であります。」
下土は低い声に頼みつづけた。

「それはお前の招いたことだ。」
「罰は甘んじて受けるつもりであります。ただどうか起立していることは」

「ただ恥辱と云う立てまえから見れば、どちらも畢^{ひつきよう}竟^{きやう}同じことじゃないか？」

「しかし部下に威厳を失うのはわたくしとしては苦しいのであります。」

甲板士官は何とも答えなかつた。下士は、——下士もあきらめたと見え、「あります」に力を入れたぎり、ひとこと一言も言わずたたくに佇んでいた。K中尉はだんだん不安になり、（しかもまた一面にはこの下士の感傷主義に欺だまされまいと云う気もない訣わけではなかつた。）何か彼のために言つてやりたいのを感じた。しかしその「何か」も口を出した時には特色のない言葉に変わつていた。

「静かだな。」

「うん。」

甲板士官はこう答えたなり、今度は顚あざをなでて歩いてゐた。海

戦の前夜にK中尉に「昔、木村重成は……」などと言い、特に
叮嚀ていねいに剃そっていた顚あごを。……

この下士は罰をすました後のち、いつか行方不明ゆくえになってしまった。
が、投身することは勿論 当直とうちよくのある限りは絶対に出来ないの
に違いなかった。のみならず自殺おこなの行われ易い石炭庫せきたんこの中にも
いないことは半日とたたないうちに明かになった。しかし彼の行
方不明になったことは確かに彼の死んだことだった。彼は母や弟
にそれぞれ遺書を残していた。彼に罰を加えた甲板士官は誰の目
にも落ち着かなかつた。K中尉は小しょうしん心しんものだけに人一倍彼に
同情し、K中尉自身の飲まない麦酒ビールを何杯も強しいずにはいられな
かった。が、同時にまた相手の酔うことを心配しずにもいられな

かった。

「何しろあいつは意地っぱりだったからなあ。しかし死ななくつても善いじやないか?——」

相手は椅子からずり落ちかかったなり、何度もこんな愚痴を繰り返していた。

「おれはただ立っていると言っただけなんだ。それを何も死ななくつたつて、……」

××の鎮海湾へ碇泊した後、煙突の掃除にはいった機関兵は偶然この下士を発見した。彼は煙突の中に垂れた一すじの鎖に縊死していた。が、彼の水兵服は勿論、皮や肉も焼け落ちたために下っているのは骸骨だけだった。こう云う話はガンルウム

にいたK中尉にも伝わらない訣わけはなかつた。彼はこの下士の砲塔の前に佇たたずんでいた姿を思い出し、まだどこかに赤い月の鎌なりにかかっているように感じた。

この三人の死はK中尉の心にいつまでも暗い影を投げていた。彼はいつか彼等の中に人生全体さえ感じ出した。しかし年ねん月げつはこの厭えん世せい主義者をいつか部内でも評判の善よい海軍少将の一人に数えはじめた。彼は揮毫きごうを勧められても、滅多めったに筆をとり上げたことはなかつた。が、やむを得ない場合だけは必ず画帖がじょうなどにこう書いていた。

君きみ看み双よ眼そう色がんのいろ

不かたら語ざれば似うれいな無ぎに愁にたり

3 一等戦闘艦××

一等戦闘艦××は横須賀軍港のドックにはいることになった。修繕工事は容易に捗どらなかつた。二万噸の××は高い舳の内外に無数の職工をたからせたまま、何度もいつにない苛立たしさを感じた。が、海に浮かんでいることも蠣にとりつかれることを思えば、むず痒い気もするのに違いなかつた。

横須賀軍港には××の友だちの△△も碇泊していた。一万二千噸の△△は××よりも年の若い軍艦だつた。彼等は広い海越しに時々声のない話をした。△△は××の年齢には勿論、造船技師

の手落ちから舵かじの狂い易いことに同情していた。が、××を舐いたわるために一度もそんな問題を話し合つたことはなかつた。のみならず何度も海戦をして来た××に対する尊敬のためにいつも敬語を用いていた。

するとある曇つた午後、△△は火薬庫に火のはいつたため、俄にわかに恐しい爆声を挙げ、半ば海中に横になつてしまつた。××は勿論びつくりした。(もつとも大勢おおぜいの職工たちはこの××の震ふるえたのを物理的に解釈したのに違いなかつた。)海戦もしない△△の急に片輪かたわになつてしまふ、——それは実際××にはほとんど信じられないくらいだつた。彼は努めて驚きを隠し、はるかに△△を励したりした。が、△△は傾いたまま、炎ほのおや煙の立ち昇のぼる中

にただ唸り^{うな}声を立てるだけだった。

それから三四日たった後^{のち}、二万噸の××は両舷の水圧を失つていたためにだんだん甲^{かんぱん}板^{ばん}も乾割^{ひわ}れはじめた。この容子^{ようす}を見た職工^またちははいよいよ修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離していた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまった。こう云う△△の運命を思えば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗^なめ尽していた。××はもう昔になつたある海戦の時を思い出した。それは旗もずたずたに裂^さければ、マストさえ折れてしまう海戦だった。……

二万噸の××は白じらと乾いたドックの中に高だかどと艦首^{もた}を擡^{もた}げていた。彼の前には巡洋艦や駆逐艇^{しゅつにゆう}が何隻も出入^{しゅつにゆう}していた。

それから新らしい潜航艇や水上飛行機も見えないことはなかった。しかしそれ等は××には果^はな^かさを感じさせるばかりだった。××は照つたり曇つたりする横須賀軍港を見渡したまま、じつと彼の運命を待ちつづけていた。その間^{あいだ}もやはりおのずから甲板のじりじり反^そり返つて来るのに幾分か不安を感じながら。……

(昭和二年六月十日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三つの窓

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>